

シ居リドモ、而カモ此、不幸タルヲ免カレザリシ
ハ、先キニ疾ク大島へ向ツテ走リシ者多カリシガ爲
メナリ、其夜モ己ニ明ケ、味方ニハ差シタル損害モナカ
リシコト、明白ニナリタリ、余ハ妙見ノ方向、長岡ヲ距
ル一里許ノ野中ノ寺ニテ、僧ニ命ジテ朝餉ノ仕度ヲ
爲サシメ、ナカラ、心算カニ以テ、敵ハ必ズシモ大
軍ニ非ザルヘシ、昨夜ハ不意ノ事ト云ヒ、且ツ市街地
ノコトナレバ、客兵ヲ以テシテ、地環ニ精通セル敵ト
相戦フコトハ、本ダ不利益ナルニヨリ、已ハヲ得ズシ
テ退却ヲ爲シタリト、虫ドモ今朝隊伍ヲ整ヘテ一戦

三音中ニ四復
皆軍上陸之
作戦頗る影
響ヲ及ボス
可ク急進
長岡城ニ再
七攻落シ前
進、米心ナリ

ヲ試ムルニ於テハ、敵ヲ撃退スルニト、或ハ本ダ困難
ナラゲルモ、モ知ル可カラズト、因ツテ福原ニ此意ヲ
語り、報國隊ヲ長ク意向ヲ尋テシメ、タリニ、彼等ハ彈
藥ハ、缺乏ヲ理直トシテ、進撃ヲ難クズルノ色ヲリト
モ、ハリ、別ニ烈シキ最弱ヲ爲シ、ルニモ非ザル是等
ノ諸隊、忽チ彈藥不足ヲ説クニ至リテハ、如何ニ
モ其意ヲ得ザルコトニテ、是レ全ク意氣ノ沮喪セル
ナリ、意氣ノ沮喪セル軍勢ヲ以テシテハ、縱令ヒ小敵
ニ對スルトモ、必勝ヲ期スベカラザルガ故ニ、余ハ遺
慮ナカラ、進撃ヲ思ヒ止マリタリ、而カモ余ハ如何ニ
モシテ、今後三日ノ中ニ長岡ヲ恢復スベシト思念シ

長岡藩戦争之記ヲ按ズルニ、同夜、襲撃ニツキテ、頗ル注目スベキ記事アリ、尤ニ之ヲ抄出セシメ
 前月二日、今町ノ一戦以來、官軍陣ヲ縮ム、長岡城下ヨリ一、二、三里ノ外、巽ノ方、半藏金村邊ヨリ東北ハ廻ラシ、乾ノ方十二、馮村邊マデ、大丸廣袤十里程、山川、要害ニ拠リ、胸壁ヲ築キ、固守ス、我兵對壘五十日程ノ間、信濃川西、奥板城北ヨリ、海濱出雲崎辺マデモ、同様ノ姿ニテ、昼夜砲声不相絶、屢要撃、大小戦ノ毎度、徒ラニ人数ヲ傷ヒ、彈藥ヲ費ヤシ、何時可休休モ不相見、總督河村継之助策ヲ決シ、同十七日夜、

折尾町ニ於テ諸藩集會、同廿日夜、長岡勢ハ、間道ヨリ長岡ハ打入リ、諸藩ハ本道ヨリ總進撃ニ決ス、但雨後田圃水多ク廿四日マデ延日
 同廿四日、前哨兵十人、次ニ前軍銃士隊長大川市左衛門、銃卒隊長千本木林吉、軍事掛三島億二郎、銃士隊長花輪彦左衛門、銃卒隊長榎小太郎、大隊長山本帯刀、二軍銃士隊長稻垣林四郎、銃卒隊長藤原伊左衛門、銃士隊長鬼頭六左衛門、銃卒隊長小野田伊織、軍事掛三間市之進、三軍銃士隊長遠邊、銃卒隊長望月忠之丞、銃士隊長小島久馬右衛門、銃卒隊長奥山七郎左衛門、軍事掛花輪求馬、本陣總督河

井継之助並諸役莫、後軍銃士隊長稻葉又兵衛、今泉
 岡右衛門、銃卒隊長内藤直記、大隊長牧野圖書、銃卒
 隊長河井平吉、横田大助、大隊長稻垣主税、總計十
 小隊、役人トモ六百餘人、約束ヲ嚴令シ、糧食ヲ負擔
 シ、旗ヲ卷キ鼓ヲ包ミ、夕第六時見附ヲ發シ、字八町
 沖ト云フ深田沼川ノ中ヲ潜行シ、將ニ宮下村ニ至
 ラントス、時ニ月東山ノ間ニ出テ、番兵道ニ當リ、漸
 々焚キ、胸壁間相性来スルヲ見ル、密ニ傳令、總軍稻
 田ノ中ニ伏シ、忍フコト一字間、邊ニ月雲間ニ隱レ、
 咫尺不辨、乃チ宮下村ニ入リ、官軍散退ス、茲ニ於テ
 全軍道ヲ分ツテ長岡ニ入ル

同廿五日 曉、前軍ヲ二分シ、大川、千本木ノ二隊ハ
 浦瀬寺ノ官軍ニ備ヘ、花輪樓ノ二隊ハ福島ノ衝道
 ニ當リ、富島村ニ放火ス
 二軍ノ四小隊ハ、龜貝本道ヨリ新保ニ至リ、所々放
 火、稻垣、篠原ノ二隊ハ、藏王、石内ニ入ル、官軍散乱敗
 走、鬼頭、小野田ノ二隊ハ、直ニ新町ニ入リ、官軍拒擊
 暫時ニシテ又敗退ス、是ニ於テ、四隊集合、新保橋上
 ニ陣ス、第七字前官軍城岡堤東西ヨリ赤擊、我邀戰
 昼後第三時ニ至ル
 三軍ノ四小隊、龜貝通リ三ノ江土堤ノ間道ヨリ長
 岡ニ入リ、渡辺、望月ノ二隊ハ、神田所放火、官軍狼狽、

表町近探索、町口ヨリ、小島、奥山ノ二隊ハ山田、草生津諸村ニ進ム、官軍信濃川辺草莽葎草中各所ヨリ突撃、渡辺隊内藤ノ半隊未援、共ニ奮戦セテ破ル、官軍敗走、信濃川辺葎草ノ間ニ隠レ、後辛クジテ川ヲ渡ルト云フ

後軍ノ五小队ハ、永田ヨリ堀金通り地藏町ニ進ミ、稲葉、今泉、内藤ノ三隊ハ、近辺探索、城北ニ入り守衛、河井、横田ノ二隊ハ、地藏所ヨリ長倉ハ進ミ火ヲ放チ、退テ四郎九口ヲ固ム

当初浦瀬、福島ノ官軍尾撃ニ備ル四小队、我各隊ノ長岡ニ入ルヲ認メ、西所ノ守衛ヲ解キ、長岡地方ニ

進ミ、大川、千本ノ二隊ハ、川崎口ニ備メ、花輪、榎ノ二隊ハ、長岡ノ南宮原村ノ進ム、官軍要地ニ拠テ防禦ス、我一隊其背後ニ出テ、犄角之ヲ破ル

福井、百束二村ニアル我大砲二門、米藩ト合併シ、曉第三字富嶋村ニ火焰ヲ望ミ、筒場、大黒二村ニ向ヒ突砲、私曉ニ至ルマデ間断ナシ、第五字頃官軍押切村ヨリ進攻ス、而シテ米藩固守、昼後第四字後、米藩三小队百束ヨリ大黒水門ヲ攻撃ス、黄昏ニ至リ官軍敗退、米兵大黒ニ入テ放火ス、我砲兵十餘名米兵ト合シ、七軒口胸壁ヨリ筒場村ニ入ル、官軍退走、進テ下奈村ニ至ル、官軍遂ニ川ヲ渡テ西ス、是ニ於テ、

我砲隊長由良安兵衛砲兵ヲ進メテ新保村ニ至ル、
 尔時長田市街郊野火焰天ヲ覆ヒ被我分明テラズ、
 乃チ新保村ニ止テ搜索ス
 此後ヤ暮ヲ以テ報ヲ制スルガ為メ、暗ニ兼テ四軍
 ヲ八分シ、頽ノ方向ヲ約シ、合謀ヲ定メ、八方道ヲ異
 ニシ、各所火ヲ放テ、或ハ鼓シ或ハ喊シ、諸方ノ攻口
 ハ、朽尾、城山、田井上山ニ於テ相圍メ、流火屋ヲ揚ル
 ヲ、大砲連發頽ル猛烈、勉メテ火勢ヲ盛ンニシ、其勢
 ヒ討ル可カラザルヲ以テ、官軍途ヲ失ヒ、各所宿陣
 皆狼狽、或ハ西奔川ヲ渡リ、又ハ南走山ニ登リ、一旦
 頽敗スト至モ、天明ノルニ及ンテ、殘兵返戰、援軍又

十四日早天ヨリ
 作戦ノ決定ヨリ
 官軍ノ進軍
 トリテ、諸將
 六島、皆前
 線ニ出テ、日
 砲隊攻撃ス
 砲隊ニテ、時
 機ニ依テ、敵
 ノ進軍ヲ
 リテ、砲隊
 進軍ヲ

多ク、終日來撃數回、我ニ當リ屢之ヲ退メ、晡時我
 兵隊悉ク城址ニ集リ、各隊方面ヲ分ツテ守衛ス、官
 軍奮戰時ヲ移スト至モ、我兵亦死力ヲ極メ、苦戰
 必勝ヲ期ス、而シテ福中口ノ官軍既ニ敗レ、其勢ヒ
 衰フベカラズ、遂ニ總敗軍ニ至ル
 敵カ雨後田圃ニ水多キノ故ヲ以テ、当初廿日ノ夜ニ
 試ミントシタル襲撃ヲ廿四日ノ夜マデ延引シタル
 ハ、偶然ニモ獲レノ利益トナリタルモノニテ、若シ廿
 日ノ夜ニ襲撃ヲ蒙ルシテ、我ガ兵ノ長田ニ在
 ルモノ、尚太ガ少ナカラズ、而カモ其ノ大部分ハ、城下
 ノ地理ニ暗カラザリシヲ以テ、縱令ヒ一時ハ退却ヲ

(200) 八願山遺 徳ナレ若 廿日夜ニ 襲撃ヲ成 獲兵長某 駐ビシニシテ 手必照大敵 二到テカリシ 此夜長面城 下ニ集注セ 隊シ兵ハ二三小

為ス、止ム可カラザルニ至リシニモセヨ、翌朝ハ直
ナニ盛リ返シテ、長岡ヲ取リ戻スコトヲ得タリシナ
ルベシ、天明クモ及ンテ、殘兵返戦、援軍又多ク、終日
未撃致回ト云フモ、ハ、當時妙見口ニ在リタル餘ノ
知ルニ及バザリシ所ニシテ、余ハ後ニ至リテ始メテ
之ヲ聞キ、益ス遺憾ニ堪ヘザリシナリ
奇兵隊ノ報告書、廿五日ノ条ニ曰ク
妙見口ハ、村松、金倉山等ニ兵ヲ分チ、大島口ハ、諸藩
ノ殘兵僅カニ六イ人ヲ以テ、信濃川ヲ前ニシ拒止
ス、我一番小隊、加州、松代、兵、猶中島ニ在リ、彈藥已
ニ尽ントシ、糧食ヲ送ルコト能ハズ、日暮漸ク舟ヲ

一泊、上直ニ 明曉發途 山路攻撃 二加ハル兵 ナレハ土地ノ 情況ヲ知ラ ナル所ナラス 前線多數ノ 攻撃兵部 署ヲ守備 シ在レハ木 安ニシテ熱 雖シヤリタル 情況ナリ 余モ亦同 様也可シ

(201)

渡シ大島ニ返ルコトヲ得タリ、妙見ヨリ信濃川ヲ
隔テ、高梨、浦村、飯島、大島、榎下マデ五里間、敵皆十渡
ルベシ、少兵ヲ分配シテ、疎々之ヲ守ル、危キコト甚
シ、是日振武一小隊森立ヨリ下リ援ヒ、薩兵十ニ瀉
辺ヨリ来リ、同シク城下ニ打入リ、大ニ賊ト戦フ、妙
見大島ノ味方未ダ之ヲ知ラズ、薩兵振武皆十ニ瀉
瀉ニ退ク、大島ノ兵城下ノ砲声ヲ聞キ、妙見ノ味方
出戦フカト疑ヒ、六十許人ヲ以テ急ニ川ヲ渡ラン
トス、賊俄カニ葦葦間ヨリ放射ス、遂ニ渡ルコト能
ハズ、薩州諸藩川辺ヨリ福島等諸砲台皆戦アリ、薩
州、加州、死傷甚多シ、夜皆ナ引テ榎下ヨリ涉リ関原

七 困 陸 七
 タ シ ノ ハ 海 路
 ル シ ハ 其 背 後 ヲ 進 突 シ タ ル 官 軍 ガ 松 ガ 崎 付 近 ニ 上
 之 ニ 相 違 十 シ ト 虫 ド モ 而 カ モ 河 井 ノ 重 傷 ヲ 負
 亦 英 カ リ テ カ ア リ シ ナ ラ ン 乎

二 退 ク 今 朝 朽 尾 口 興 板 口 賊 皆 ナ 来 リ 衝 ク 我 六 番
 小 隊 城 山 ニ テ 拒 戦 ス
 去 レ バ オ 五 日 ニ 激 戦 ノ マ リ タ ル コ ト ハ 明 白 ナ ル 事
 實 ニ シ テ 現 ニ 是 日 ニ 於 ケ ル 敵 兵 ノ 死 傷 ハ 死 者 渡 辺
 進 藤 原 伊 左 衛 門 以 下 六 十 一 人 負 傷 者 河 井 繼 之 助 宿
 垣 林 四 郎 大 川 市 左 衛 門 奥 山 七 郎 左 衛 門 小 野 田 伊 織
 以 下 五 十 一 人 ノ 多 キ ニ 及 ビ 居 ル ナ リ 而 シ テ 是 日 河
 井 繼 之 助 ガ 重 傷 ヲ 負 ヒ 後 十 遠 ニ 之 ガ 為 メ ニ 死 ス ル
 ニ 至 リ タ ル ハ 實 ニ 敵 兵 ノ 為 ト ニ 大 打 撃 タ リ シ ヲ 疑
 ハズ 廿 九 日 ニ 長 岡 ノ 恢 復 ガ 成 マ デ ニ 困 難 ナ ラ ガ リ
 シ モ ノ 及 ビ 尔 来 敵 兵 ノ 抵 抗 カ ガ 著 シ リ 減 退 シ タ ル

(204)

越ノ山風

自七月廿六日
至十月七日

長岡ヲ取り返サレタルコトハ、大ニ諸藩ノ人心ニ
 影響ヲ及ボシ、中ニハ急使ヲ京師ニ出シテ、事變ヲ報
 告スベキ事ナド、照會シ来ルモノモアリタリ、余ハ三
 日ノ中ニ必ス長岡ヲ恢復スヘキニツキ、改メテ京師
 ニ報告スルノ必要ナキ旨ヲ以テ、之ヲ斥ケタレドモ、
 要スルニ是レ敗餘ノ人心ヲ鎮静シ、以テ神速ニ攻撃
 ノ画策ヲ立ツルノ決心ニ過キス、諸兵ヲ集注シ、總テ
 ノ準備ヲ為スニハ、多少ノ時日ヲ要スルコト勿論ニ
 シテ、長岡恢復ノ困難ナルコトハ、其案余ノ頭腦ヲ苦
 シメツ、アリシナリ

廿五日ニハ、朽尾口ニ前進シ居レル我ガ兵ト、連絡ヲ絶タレザル為メ、必要ナル手段ヲ施コシ、且ツ要所々々ハ、少数ヲカラ警備兵ヲ配置シ、夜間ハ自カラ哨兵線ヲ巡視シテ、嚴重ニ警戒ヲ為シタリ

廿六日ニ至リ、長岡恢復ノ方略等ヲ議セニ為メ、始メテ妙見ヨリ関原ニ赴キタルガ、本營ノ玄關ニテ將サニ馬ヨリ下リシトスル時、恰カモ賊ガ川ヲ渡リテ関原ニ来襲セントスルノ情報アリシ由ニテ、本營ノ人何トナク不安ノ体ニ見ヘタルヲ以テ、余ハ其込馬ヲ飛シ、實地偵察ノ為メ直チニ河岸ニ至リ見ヨルニ大鷲ノ渡船場付近ニハ、官軍数門ノ山砲及ヒ加農砲

ヲ備ヘテ、對岸ノ賊兵ヲ砲撃シツ、アリ、一向ニ敵兵渡河ノ模様ナキニヨリ、念ノ為メ更ニ一里許リ下流ナル川袋ノ方ニ人ヲ出シ、偵察ヲ為サシメタルモ、同シク賊ノ渡リ来ルヘキ模様ナシトノ事ナリシカバ、惣々トシテ関原ヘ歸リ来ル途中、今ハ故人トナリタル松代藩ノ渡邊驥ガ、此方ヲ指シテ来ルニ逢ヘリ、彼レハ余ニ問フニ河畔ノ状況ヲ以テシ、且ツ曰ク、関原ニテハ敵ガ川袋辺ヲチニ々々(薩摩詞ナリ)渡リタリトノ説アリ、為メニ狼狽シテ相崎方向ニ退却スル音モアリ、一時ハ非常ノ混雜ナリシモ、其後稍時間ノ經過シタル今ニ至ルマデ、敵ノ襲来スルコトナケレ

バ、不審ニ堪ヘス、實況ヲ視察センガ為ニ出テ来リ
 ヲリト、余ハ笑ツテ毫モ異状ナキコトヲ告ケ、別レテ
 本營ニ帰り見レバ、先刻ノ騒動ハ、渡邊ノ語リシヨリ
 モ太甚シカリシ由ニテ、諸藩ノ中ニハ、殆ンド柏崎辺
 マデ走りタルモノモアリシト云フ、實ニ笑止ノ至リ
 ナレドモ、敗軍後ノ士氣ハ、往々ニシテ此ノ如キコト
 ノアルモノアリ、富士川ノ水禽ニ驚キテ敗走シタル
 平家ノ軍勢ヲノミ、笑フヘキニ非スト思ヒタリ
 余ハ本營ニテ、吉井ト協議ヲ為シ居タル折柄、振武隊
 ノ隊長竹本多門昇来リテ、余ニ語リテ曰ク、昨日ノ事
 ハ、實ニ遺憾千万ナリ、自分ハ長岡ガ賊ノ手ニ取り返

サレタルヲ聞キ、森立峠ヨリ下リ来リテ、一戰ヲ試ミ
 タルニ、賊ハ左マテノ大兵ニ非ガルヲ以テ、恰カモ十
 ニ瀉ヨリ来リタル薩兵ト相合シテ、賊兵ヲ鏖殺セン
 ト欲シ、薩ノ本陣ニ出兵ヲ請ヒタルニ、司令官タル吉
 井孝躬ガ、芝ヲ聽カバトコトニテ如何トモスルコ
 ト能ハズ、自分等ニ薩兵ト同ジク、空シクナシ瀉へ退
 キ、昇テ当地エ引揚ケタルニ至レリ、若シ我が策ノ行ハ
 レタランニハ、昨日中ニ己ニ長岡ヲ恢復スルコトヲ
 得タリシナリト、辞氣激烈、悲憤自カラ禁セザルノ状
 アリ、彼レハ現ニ余ト對話シ居レル人ガ、即チ吉井參
 謀其人ナルコトヲ知ラザリシナリ、余ハ全軍ノ進退

ニツキテ責ヲ帯フ人ニハ目カラ別ニ意見ノアル
 コトナルベク、一隊長ノ身ヲ以テ、猥リニ之ヲ非議ス
 ハキニ非ザルヲ論シ、之ヲ返シタルガ吉井ヨリ彼レ
 ハ何人ナルヤノ問アリ、長州ノ社士竹本某ナル者ヲ
 語リテ其ノ失言ヲ謝シ置キタリ、因ニ云フ右竹本多
 門ハ其翌廿七日十日町ニ於テ負傷ヲ為シ、後遂ニ之
 ガ為メニ死シタリ、惜シムヘキコトナリ
 官軍ノ氣勢揚ラザルコト右ノ如ク、從ツテ吉井ノ如
 キモ、彈藥ノ缺乏セル為メ、急ニ長岡ヲ恢復スルコト
 ノ困難ナルヲ説キ、一旦兵ヲ高田ト三國峠トノ西方
 面ニ引揚ゲ、更ニ援兵ノ来着スルヲ待テ、徐クニ進

廿八日三津
 前衛兵出陣
 時期ニ後レ
 引カレ不得
 已ニ九日迄
 引カレ

撃ノ策ヲ講スヘシトノ意見ナリシガ、余ハ長州ノ方
 ニ彈藥ノ餘裕アルヲ以テ、之ヲ薩兵ニ供給スルコト
 ニスベシ、兎ニ角長岡ノ恢復手間取リテハ、曩キニ海路
 ヨリ進發シタル軍隊ト、腹背相合撃スルノ時機ヲ失
 スルノミナラズ、士氣沮喪シテ、万事ニ不利益ナリト
 テ、迅速進撃ノ策ヲ主張シ、終ニ之ニ一決スルコトヲ
 得タリ、然レトモ三日ノ中ニ長岡ヲ恢復セントシタ
 ル余ノ決心ハ、種々ノ事情ニ妨ケラレテ、遺憾ナガラ
 之ヲ達スルコト能ハズ、廿九日ノ早天ニ至リテ、始メ
 テ大進撃ヲ試ムルコトヲ得タリ
 曩キニ海路ヨリ進發シタル官軍ハ一旦依渡ノ小水

港ニ入り、其夜半同港ヲ祭シ廿五日ノ朝ヲ以テ、大夫
 濱ニ上陸シタルニ、其ノ近傍ニハ、賊ノ隻影ヲモ見ザ
 リシニヨリ、千城隊、七八番小隊、第一砲分隊、薩州及ビ
 藝州等ノ兵ハ、松ガ崎及ビ新瀉ニ向ヒ、奇兵隊五番小
 隊、報國隊及薩州等ノ兵ハ、新瀉田ニ向ヒヨリ、然ルニ
 新瀉田藩ハ豫テ寺田、相馬兩人ノ言ニ違ハス、藩主溝
 口誠之進、重臣ヲ出シテ王師ヲ迎ヘ、反正ノ功ヲ立テ
 ンコトヲ乞ヒタルヲ以テ廿六日ニハ、便チ新瀉田兵
 ヲ先鋒トシテ、薩州、藝州、明石兵ハ水原ニ、奇兵隊、藝州
 兵、徵兵ハ笹岡ニ向ヒ、廿七日ノ朝、西所共ニ賊ヲ破リ
 タル由ニテ松ガ崎ニ向ヒヨル軍艦司令山田市之丞

ハ廿七日ノ夜ニ関原ニ来リ、親シク之ヲ報道セリ、是
 ニ於テ半、長岡ノ恢復ハ、益々遲疑ス可カラザルコト
 ニナシテ、便チ山田ノ関原ニ来リタルハ、余ノ最モ歎
 喜ニ堪ヘザリコトナリ
 廿九日ノ進撃ニハ、妙見口ノ兵ガ首カトナリ、川手ト
 本道トヨリ早曉ニ進軍ノ苦ナリシモ、本道ヨリ進ム
 ヘキ千城隊ノ出陣ガ、稍遲刺シタル為メ、敵ノ前營ニ
 近ソキタル頃ニハ、天已ニ晴ケタリ、然レドモ幸ニシ
 テ朝霧ノ深カカリシ為メ、何等ノ故障モナク直進ス
 ルコトヲ得一戰直チニ前營ヲ破碎シテ火ヲ民家ニ
 放チタルレ、敵ハ狼狽シテ殆ンド一支ヘモ為サズ、砲

翌ヲ捨テ、走り、我兵ハ勢ニ乘シテ、臺進シ、長岡城壁
 ノ直下ニ押寄せ、殆ンド彈丸ヲ發射スルコト能ハカ
 ルニ至レリ、此時ニ當リ、金倉山等ニ在リタル山手ノ
 兵モ、朝セシテ右翼ニ下リ、采リ、同シク長岡城壁ノ
 下ニ迫リタルガ、此手ノ兵ハ彈藥ノ已ニ竭キタルヲ
 報セリ、因ソテ余ハ彈藥ハ竭クルトモ、軍外ハ腰ニ在
 ルマシトテ士卒ヲ激勵シ、十カラモ大嶋口ヨリ彈藥
 ヲ取り寄セシルコト及ヒ、我カ兵ヲ彈丸ヲ發射シ得ル
 ノ地點ニ轉スルコトニツキ、大レ々々指揮ヲ為シ居
 タル中ニ、大嶋口、飯島等ノ官軍モ亦皆ナ川ヲ渡リテ、
 左翼ヨリ臺進シ、味方ノ勢ニ頗ニ増加シタルト同時

ニ城上ニ當リテ忽チ轟然タル爆撃ヲ聞キ、是レ
 即チ賊ガ自カラ彈藥庫ヲ爆發シテ潰奔シタルナリ
 官軍ハ勢ニ乘シテ急撃突進、終ニ全捷ヲ得テ見付、
 今則チテ進入セリ、左ノ奇兵隊ノ報告書ヨリ、當日ノ
 記事ヲ抄出スバシ
 廿九日 妙見口奇兵、叛國ノ城、薩州等ハ小隊、川手
 本道(川手ト本道ト兩道ヨリ進撃シタルナリ)ヨリ、
 曉霧ニ乘ジ、十日所寄諸地ニ進撃ス、賊不意ヲ襲ハ
 レ、砲台ヲ捨テ走ル、故兵大ヲ放テ勢ヲ助ケ、斬時間
 ニ長岡市外ニマテ攻付、大ニ戰フ山手ヨリハ金倉
 山、村松ヨリ勢ニ乘シテ進ミ、大嶋口、飯島等諸村ヨ

此ニ於テ長岡城ハ五ヒ陥落シ
 潰奔シタルナリ

一時二川ヲ渡シ、我一番小隊、加州、上田、高田、薩州、
 御親兵、若州、岩村、富山等、火ヲ草生津ニ放テ奮戰
 又賊兵終ニ大ニ敗ル、花土峠、壹峠ヨリ半藏金ノ官
 軍下リ撃テ、味方ニ面急撃、城下悉ク火トナリ、賊ノ
 彈藥遂ニ作シ、猛聲如雷、我兵打鼓呐喊、憤進長驅、筒場、
 新二瀉、浦瀬、桂沢等マテ追撃ス、楨下等ヨリモ薩兵
 等川ヲ渡リ、興板ヨリモ兵ヲ渡シ、沿江ノ村家ニ放
 又シ、勢ヲ助テ、賊急遽去、吾禦クコト能ハズ、遂ニ敗
 績シ、福井、百束、秋根、宝所等皆テ守ラズ、我十三番小
 隊、水門、大黒ノ砲台ヲ奪フ、朽尾ノ賊モ、長沢、八十里
 越ニ退リ、我が十二番小隊、諸藩兵モ追テ朽尾ニ

長岡^ルノ賊兵已ニ潰走シタル後ハ、賊軍ノ氣勢大ヒニ
 衰ヘリルト同時ニ、官軍ノ氣勢ハ大ヒニ昂ガリ、曩キ
 ニ最モ弱カリシ兵ハ、今ヤ却ツテ最モ強キ兵トナリ
 タルガ如キ感ジサヘモ之アリシナリ、從テ是ヨリ
 後ハ、攻守トモニ、從前ノ如ク精神ヲ勞スルコトハナ
 カリシナリ
 八月一日以後、即チ長岡恢復ノ翌日以後ノ交戦ニツ
 キテハ、九ニ奇兵隊ノ報國書ヲ抄出シテ、其ノ概要ヲ
 示スヘシ
 八月朔日 赤坂、報國隊、徵兵、薩州砲、本道ヨリ赤坂

ヲ攻撃シ、明石、藝州兵、山間、間道ヲ經テ進ミ、我五
 番小隊、新谷田一小隊、山上ヨリ赤阪ノ後口ニ進ミ、
 辰牌前赤阪ノ砲台七所ヲ破リ、草水村ニ放火シ、砲
 臺ヲ築テ諸藩兵ニ守ル、賊石間ニ拠ル
 長岡口ノ官軍、北ルヲ逐テ見付、今所、大面等ヲ取ル、
 典板口ノ賊亦走ル、我六番小隊、諸藩兵ニ追テ全カ
 崎、地藏堂ニ入ル、出雲崎口ヨリハ、我二番小隊、諸藩
 兵ト欺賊ヲ追ヒ、日ノ浦、木芽峠ヲ破リ、大ニ進一椽
 尾口モ葦谷、文納、長沢等ヲ取ル
 二日、大面ノ官軍、進テ月岡ニ至ル、薩兵五ノ嵐川
 ヲ隔テ、大崎ノ賊ト挑戰ス、我一番小隊、赴キ援テ、川

原曠、豁屏、竊ナク、戦頗苦、日晡、賊退ク、新谷田兵六小
 隊(賊ニ加ハリ居タル者ナリ)見付ニシテ降伏ス
 三日、五十嵐川ヲ渡リ、三茶ニ入ル、六番小隊モ地
 蔵堂ヨリ来リ會ス
 四日、大番小隊、加茂新田ニ進ミ、賊ト睨ミ合ヒ、未
 ダ發射シ、不時ニ本道ノ官軍進テ、賊ト戦ヒ甚カ、劇
 ナリ、我六番小隊、薩州兵小隊分テ、賊ノ横合ニカ、
 ル、本道ノ賊、欺レ走ル、加茂新田ノ賊モ亦走ル、其翌
 日、加茂ニ入ル
 新谷田口ノ官軍(新谷田口ノ官軍トヤルハ、後背軍
 ヲ松ガ崎ヨリ上陸シタル者ナリ)以下皆ナ然リ、四

日已牌五泉一入山五泉、兵二小队迎付、先鋒シテ
 直チニ村松城ヲ攻ム本道市口ヨリハ、五泉兵ト我五
 番小队、左ノ裏手ヨリハ、五泉兵ト薩州一小隊、山ノ
 後口ヨリハ、報國一小隊、薩州一小隊進ミ戦ヒ、午牌
 村松城ヲ拔キ之ヲ燬ク、即時五泉ニ引場ガ村松人
 百六七、其公子ヲ擁シ、城外ノ寺ニ籠リ降ル、其奸
 賊等ハ、其君ヲ要シテ早ク會津ニ走レリ、八十里越
 口ノ兵ハ、賊ヲ追テ吉ガ平ニ迫ル、
 五日六番小队報國一小隊、五泉ヨリ村松ニ大作
 候ス(是ハ新發田口ノ兵ガ一旦村松ヲ陥落シテ直
 チニ引上タルヲ以テ、翌日再ヒ大作候ヲ出シタル

モノナルコト明白ナリ、去レバ六番小队トマルハ
 五番小队ノ誤リナルベシ)我トニ番小队、振武隊等、
 長沢、鹿峠ヨリ進テ黒水ニ至リ、敵ノ壘ヲ破リ、村松
 ニ入ル、新發田口ノ味方ト始メテ合ス(越後口ノ兵
 ハ、長沢、鹿峠等ノ壘ニ拠リタル敵ヲ撃破シ村松ニ
 至リテ、始メテ後背軍ト合シタルナリ)
 六日長岡口諸兵、五泉村、村松等ニ入り、赤阪、馬下、
 沼越、諸賊ニ当ル
 我奇兵隊皆新津ニ集リ、五番小队ハ薩兵ト新發田
 ニ赴ク、我奇兵隊連戦死傷多ク、一小隊僅カニ十人
 ニ至ルモノアリ、多クモ三十許人ニ上ラス、因ツテ

北越、賊軍已ニ略平定ニ帰シタル上ハ、殘賊ヲ驅リ
 テ、若松城下ニ押入ルノ外ナシト忍ハレタルヲ以テ、
 余等ハ會津ハ、本街道タル赤谷口ニ兵ヲ進ムルノ
 策ヲ定メ、同時ニ會議所ヲ新癸田ニ移スコトニツキ
 干根議ヲ為シタル後、余ハ十四日ニ新津ヲ出發シテ、
 片野十郎ト共ニ新瀉ニ赴キタリ、是レハ其頃同処ニ
 来リ居タル西郷吉之助ニ面會セシガ為メナリシナ
 リ。西郷ハ關東平定ノ後チ、一旦鹿兒嶋ニ歸リ、奥羽ノ官
 軍ノ為メニ、援兵ヲ増遣スルノ準備ヲ為シ居タル折
 柄、越後口ノ賊軍優勢ニシテ、寡少ナル官軍ヲ以テシ

此篇ハ越後口
 官軍中ヨリ
 單々關東向
 テ出奔セリ
 西郷ト會合
 源戰取極
 日ハ時々時
 日不分明也

テハ、容易ニ之ヲ破ルコト能ハザル者、越後口ニ出張
 ノ薩人并ニ其他ノ筋ヨリ、類々トシテ報告ニ接シタ
 ルノミナラズ、戰地ニ於ケル薩長ノ關係ニツキテモ、
 亦憂慮スル所アリシ由ニテ、終ニ自カラ海路越後ニ
 来ルコトニ決心シ、三百餘人ヲ春日艦ニ搭載シテ、去
 ル十日ニ柏崎ニ来着シタルニ、此時ニハ長岡城已ニ
 再ビ官軍ノ手ニ帰シ、新瀉モ已ニ疾ク官軍ノ手中ニ
 落テ居タルヲ以テ、直チニ新瀉ニ回航シタルナリ
 余ハ西郷ニ逢フテ、互ニ四月以來ノ經歷ヲ語り、悲喜
 交々至ルノ感ニ禁ハザリシガ、西郷ハ越後口ノ略已
 ニ平定ニ帰シタル今日、其引率ニ来リタル兵隊ヲ、茲

二 留ムルノ必要ナキニヨリ、是ヨリ庄内ノ賊ヲ攻撃
 スバ、キニツキ、現ニ越後ニ在ル所ノ兵其中心ヨリモ、幾
 分ヲ割キテ、畿ノ方ハ出シ、吳レヨトコトニテ、
 余ハ勿論又ヲ諾シ、リ、
 徒来トテモ、余ハ勉メテ、薩長ノ軋轢ヲ避ケントシ、長
 州ノ隊長等ニ向フテ、注意ヲ加フルニ、怠ラザリシモ、
 西郷ニ面會シテ、互ニ杞憂ヲ叙バ、タル後ハ、一層此點
 ニ注意スルコトニナレリ、去レバ、社年血氣ナル長州
 人ノ中ニハ、余ノ薩人ニ讓歩スルコト多キヲ慨シ、
 カニ不平ヲ抱キ、タル者モ少ナカラザリシ由、余ハ後
 ニ至リテ始メテ、之ヲ聞キ、タリ、思フニ、
 九モアリシナ

ルハ、シ、然レドモ、当時薩長ヲシテ、互ニ相軋轢セシメ
 タラシニハ、其ノ結果ハ、果シテ如何ナレバ、キ
 ヲ、余ノ西郷ト憂ヒテ、分チタルモ、
 ニスルノ微衷ニ外ナラザリシナリ、
 余ガ新瀉ヨリ、新發田ニ赴キ、タル時ニハ、官軍ハ已ニ
 赤谷ノ賊ヲ撃破シ、テ、
 其ノ交戦ニツキテハ、奇兵隊ノ報告書ニヨリテ、
 概要ヲ掲載スベシ、
 十四日、未明ヨリ、赤谷口ヲ進撃セント、本道ヨリ、
 藝州、新發田、千城隊、北辰隊、間道ヨリ、我五番小隊、
 州、十番隊、五番隊、新兵隊、新發田、
 進行ス、賊本道ヨリ、新

發田ヲ襲ハントスルニ、山内村外ニテ出逢ハリ、藝
 州新發田等ノ兵、突撃セラレテ支ルコト能ハズ、千
 城隊後継シテ接戦尤苦、死傷頗ル多シ、河道、我五
 番小隊、薩兵ト奮進シテ、砲台數所ヲ奪ヒ、巳牌後赤
 谷ヲ破リ、生縛四五人、賊赤谷ヲ燒テ走ル、本道ノ賊
 後ヲ絶タレ、山中ニ散乱ス、此戦ヒ間髪ヲ容レザル
 機ニテ、我兵不出ハ、賊必ス新發田ニ圍入スベシ、
 危哉
 十五日、直チニ綱本ニ進撃小隊ス、賊綱本ヲ放火
 シテ走ル、本道ヨリ、我五番小隊、薩州、加州、御親兵五
 番、徵兵、間道ヨリ、千城隊、藝州等、午牌、新發谷ヲ攻ム、賊

砲台甚堅シ、夕方終ニ之ヲ拔ク
 十六日、新發谷ヨリ、此道第一ノ險、諏訪峠ニカ、ル、
 賊一人モ、夫ハズ、辰牌、角嶋ニ至リ、川ヲ隔テ戦フコ
 ト、一時許、死傷十許人、是日大雨、懸軍深入スルヲ以
 テ、輜重ツガズ、兵士皆徒跣、夜半ニ至ツテ始メテ食
 ス
 十七日、赤谷口ノ官軍既ニ津川ニ逼ルヲ以テ、石
 間、賊皆川ヲ渡リ、谷沢、三月、沢等ヲ圍守ス、沿越、赤
 阪口ノ味方、險ニ支テ、進ムコト能ハズ、此日、我六
 番小隊、行地ヨリ、川口村ニ出テ、白崎ノ川向ニ、賊砲
 台ヲ築クヲ放射シ、日暮ニ至ル

諏訪峠ノ險ハ、曾チ松陰先生ノ紀行文ニヨリテ、之ヲ
 知り居リレバ、此ノ險道ヲ踰ルテ兵ヲ進ムルコトハ、
 至難ノ事業ナルベシト想像シ居タルモ、津川ニ逼ル
 ル官軍ハ、敢テ之ヲ意トセズシテ、直ニ津川ニ逼ル
 ニ至レリ、余等ノ喜ビ知ルベキテ、然ルニ川ヲ渡リ
 テ津川ニ至ルコト能ハズ、敵ト相對シテ空ク數日
 ヲ經過シシハ、余ノ最モ遺憾ニ堪ヘガリシ所ナリ、
 津川ハ阿賀川ノ上流ニ在リ、會津ガ侍ンデ以テ、越後
 口ヲ固守スルノ要害ニシテ、此處一タビ敗ルレバ、則
 チ若松ハ復々岸ル能ハズト稱セラル、此邊ニ於テハ、
 川幅ハ、花マテ廣カラズト云フモ、水深ク且ツ流レ急

ニシテ、舟楫ニヨラヤレバ、又ヲ濟ルコトヲ得ズ、而シ
 テ舟楫ハ總テ賊ノ為ニ豫シメ、之ヲ占領セラレテ、
 復々如何トモスルコト能ハズ、加ッルニ下流上流共
 ニ、敵前ニ於テ渡河ヲ試ミ得バ、キ適當ノ地点ナキヲ
 以テ只川ヲ隔テ、時ニ銃如ク交換スルノ點ニ、滯陣數
 日ニ涉リテ、為スコトナキ、結果、朝起河ニ臨ミテ
 ヲ洗ヒ口ヲ嗽ク毎ニ、敵ト味方ト、水ヲ隔テ、
 誠ニ津川ノ者ナルガ如ク、滑稽ノ演セラル、
 右フ、津川ノ口ヲ兵ハ片野十郎之ヲ指揮シ居タルガ、余
 ノ言カラ見合シタル所ニテ、到底舟楫ヲ以テ渡河
 行フノ外、テキニヨリ、余ハ終ニ自カラ舟ヲ造ラシ

ハルコトニ来シ、廿二日ニ新發田ヨリ舟大工三十餘
 名ヲ津川口ニ遣ハシ、余ハ此間津川ト新發田ト
 間ニ往復スルコト案ニ二回ナリシナリ
 此間余ハ下流ナル石間ヨリ兵一渡シテ、津川ノ賊星
 ニ迫ラシムルハ、工兵ヲ為シ、廿一日ニ赤阪口岩谷
 ノ水陣ニ人ヲ遣ハシテ、速カニ進撃セシムルコトヲ提ガ
 シ、廿一日ニ、更ニ報國隊一小隊ヲ岩谷ニ出張セシ
 ス、タルカ、同夜中村芳史助等ヨリノ報告ニヨレバ、岩
 谷ニ在リシ振武隊其外ノ兵ハ、昨日イヨク阿賀川
 ヲ渡リテ五十島ニ陣シ、兵ヲ分ツテ諸方ニ出シ、昨夜
 ヨリ砲戦、今朝ニ至リテ、尚未ダ已マズ、明朝ヲ期シテ、

決然進撃スヘシトノコトナリシカバ、余ハ實ニ欣喜
 ニ堪ヘス、左岸ヨリノ進軍ニヨリテ、津川ノ終ニ我が
 手ニ帰スヘキヲ想像シ居タルニ、廿四日ニ至リ、前日
 敵情聞キ合セ、ノ為メ五十島ニ赴キタル瀧原勉が、帰
 リ来リテ報道スル所ヲ聞ケバ、賊ハ谷沢ニ拠リテ、巖
 重ニ砲台ヲ築キ、兵數モ亦増加シタルノ状ヲルヲ以
 テ、進撃ハ終ニ建引ニナリタリト云フ、何ゾ失望セザ
 シヲ得ンヤ
 廿五日ニ至リテ、二隻ノ小舟ヲ作ルコトヲ得、將ヲニ
 兵ヲ濟サントシタルニ、賊ハ自カラ守リテ捨テ、走
 リ、赤谷口及ビ赤阪口ノ官軍、皆ナ津川ニ入ルコトヲ

得たり、蓋シ此間ニ於テ、若松ノ方面亦漸ク危急ナリ
 リタルヲ以テ、奇兵隊ノ報告書ニ曰ク
 廿五日、賊津川ノ險ニ拠リ、川ニ臨テ、築キ、舟
 ハ皆向、岸ニ引寄セ、防守甚嚴、官軍未ダ渡ルコト
 能ハズ、鹿瀬、角島、五十島等ニ對壘ス、南嶋ノ兵、舟ヲ
 造リ、濟川ノ用意ヲ為ス、是日未輝頃、津川ノ賊守ヲ
 捨テ走ル、赤谷口、赤阪口ノ官軍皆津川ニ入り、直ニ
 長驅賊ヲ追フ
 又北征日誌ヲ按スルニ、其第十一卷ニ、左ノ如キ記事
 あり

(前畧) 翌十六日、曉四字、御親兵先鋒長藝并新登田

等ノ諸隊、賊ヲ逐テ、諏訪嶺ニ攻登ス、賊道トテ津川
 ニ拠リ、船ヲ奪ヒ橋ヲ断ス、官軍渡リ不得、此日既ニ
 黄昏、兵ヲ諏訪嶺、柳新田ニ引上ケ、諸道ヲ嚴備ス、自
 此賊四方ノ高山ニ拠リ、築壘固守、且沿河臺場ニ日
 リ、昼夜砲發不休、我兵無舟、大河不可渡、水ヲ隔テ、
 砲戰殆七日、(實自十七日、至廿三日) 於是五泉ノ縣
 令、沿津藩寺田信三郎、申村、近村ノ舟ニ、熊夫ヲ集
 メ、且ツ鉄釘、器械、具ヲ索メ、直ニ大牧村ニ入り、伐
 木シテ、小舟二艘ヲ造製ス、廿五日午後、此舟ニ、棹シ、
 薩長ノ三小隊ヲ、彼岸ニ達シ、賊壘ヲ破リ、津川ニ
 至ル、賊守ルコトヲ得スシテ、敗走ス

北征日記、記事ハ、稍官軍ノ勢ヲ誇張セルノミ、其ノ
 大要ハ奇兵隊ノ報告書ニ異ナラザルナリ
 岡沢中將ハ、当時振武隊ノ一隊長トシテ戦地ニ在
 リ、津川口ノ攻撃ニモ参加シタル様記臆シ居タル
 ナリ、以テ一日來訪ノ節、津川口攻撃ノ際、模様ヲ尋
 ホタルニ、中將ノ語ル所ニヨレバ、第一ニ津川ニ討
 入りテ之ヲ陥レタルハ、阿賀川ノ左岸ヲ前進シタ
 ル岡沢隊ニシテ、右岸ノ官軍ハ、岡沢隊ニ迎ハラレ
 テ津川ニ入りタリト云ハリ、如何ニモ意外ノ話ニ
 シテ、實ニ創聞ニ屬スルヲ以テ、尚其ノ詳細ヲ筆記
 シ送ラシコトヲ求メタルニ、中將ハ、早速岡沢隊行

動ノ概要ヲ認メテ之ヲ寄送シタリ、其中ニ左ノ數
 節アリ
 振武隊ハ、八月七日進テ五泉ニ到リ、同八日ヨ
 リ小松ノ関門（阿賀川右岸）ヲ攻撃シ、同十一日
 遠ニ之ヲ陥ル
 岡沢隊ハ、八月八日ヨリ、馬下ノ壘（小松ノ對岸即チ
 阿賀川ノ左岸）ヲ攻撃シ、同十日ニ之ヲ陥ル
 振武隊ハ、八月十二日ヨリ、石洞ニ向テ攻撃、同
 十七日同地ヲ占領ス
 岡沢隊ハ振武隊ニ併行シテ、阿賀川左岸ヲ前進ス
 振武隊ノ大部ハ八月廿一日川ヲ渡リテ五十

ヨリ津川ニ至ハ間ニ於ケル岡沢隊ノ前進急劇ナ
 リシ為メ、退路ヲ失ヒタル敵兵ハ、振武隊ノ前進ニ
 当リ、諸河ニ出沒シテ戦ヲ交ヘタルモ、ノナラシ
 左ノ如シ
 岡沢隊ノ迂回シテ敵ノ退路ニ迫ルヤ、敵狼狽シテ
 退却セシヲ以テ、先ツ火ヲ関門ニ放テ、且ツ倉庫ニ
 就テ糧米ヲ求ム、是レ岡地ハ河賀川水運ノ終点ニ
 シテ、大小ノ倉庫軒ヲ並フルヲ以テ、一ノ糧米ヲ得、一
 中野ノ所、只食塩ノミニシテ、一ノ糧米ヲ得、一
 隊殆んど飢餓ニ陥ラントセリ、偶敵ノ炊事場ニ至

島村ニ入り、是ヨリ各地ニ戦闘セリ
 岡沢隊ハ、同日ヨリ振武隊ノ先頭ニ在リテ戦闘ス
 ルニ、昨夜未敵ハ漸次ニ退却ス
 岡沢隊ハ、此日モ亦先頭ニ在リ、川ノ左岸ニ沿ヒ、敵
 ヲ追テ前進シ、夕刻津川西端ナル関門ニ達シ、其守
 兵ト激戦シ、遂ニ敵ノ左翼ヲ迂回シテ、其ノ退路ニ
 迫ル、敵兵狼狽シテ退ク、因テ同地ヲ占領シ、火ヲ関
 門ニ放ツ、烟焰大ニ揚ル、振武隊ハ、一部ヲ以テ、水路
 ヲ溯リ、一部ヲ以テ、陸上ヨリ前進シ、途中屢戦ヒテ
 交ヘ、同夜半ヨリ翌廿六日ニ亘リ津川ニ入ル、(谷沢

レハ、飯菜狼籍、食中箸ヲ投ジテ奔リ、炊間釜ヲ覆シ
 テ逃レタル形跡歴々見ルベシ、乃チ其ノ委棄スル
 所ヲ集メテ、僅ニ飢ヲ医スルコトヲ得タリ
 此時ニ當リ、諏訪峠方面ヨリ前進セシ官軍ハ、岡沢
 隊ノ既ニ津川ヲ占領シタルコトヲ知ラズ、頻リニ
 砲撃ヲ加ヘ、危険云フバカラズ、越ヘテ翌廿六日ノ
 早朝ニ至リ、岡沢隊ハ諏訪峠ノ友軍ニ對シテ、先ヅ
 信号ヲ試ミ、且ツ舟ヲ楫シテ之ヲ迎ヘ、始メテ其危
 険ヲ免レタリ
 土民ノ言ニ拠レバ、敵兵ノ全ク若松方向ニ退却シ
 タルハ、廿六日ノ朝ナリシト云フ

廿六日夜半、若松方向ニ當リ遠ク火光ノ天ニ映ガ
 ルヲ望ム、蓋シ城市ノ兵變ニ罹リタル時ナランカ
 此ノ記録ニ拠レバ、津川ノ賊ハ、自カラ守ヲ捨テ、
 逃レタルニ非ズシテ、岡沢隊ノ為メニ撃退セラレタ
 ルナリ、且ツ岡賀川石岸ノ官軍ハ津川ニ入りタルモ、
 亦廿五日ノ午後ニ非ズシテ、廿六日ノ朝ナリ、果シテ
 然ラバ、余ノ記臆ハ勿論、奇兵隊ノ報告書及ビ北征日
 誌ノ記スル所モ、其ニ誤マレルニ似タリト云ドモ、斯
 ヲ如クナル時ハ、岩谷ニ在リタル軍隊ハ殆ンド中
 村芳之助ヨリ報告シ来リタル豫定ノ通りニ行動シ、
 僅カニ一日ノ遅延ヲ為シタルニテ、廿四日ニ瀧

原勉が齋ら三帰リタル情報トハ、頓ル相違シ居レリ、
 然レドモ龍原ハ現ニ五十島ニ至リ、親シク中村等ニ
 ツキテ聴キタル所ヲ、帰リ報ジタル者ナリ、加フルニ
 岡沢中将ノ記録ニヨルモ、廿五日ニ、振武隊が谷沢ニ
 迫リタル時ニハ、賊ハ已ニ前夜系新次ニ退却シ居タ
 リト云ハ、其間ニ若松城が危急ニ迫リタルヲ以テ
 賊ノ大部分が自カラ退却シタルコトハ、疑ヒモナキ
 事實ニシテ從ッテ廿五日ニ、津川ノ賊が自カラ逃レ
 去ル、津川口ノ官軍が川ヲ渡リタリト云フモノ、亦事
 フ可カラガナルノ事實ナリト思考ス
 山口大將及ビ三浦中将ハ共ニ奇兵隊ニ属シ、且ツ共

ニ津川口ニ在リシヲ以テ、念ノ為メ岡沢中将ノ記録
 ヲ示シ、其ノ記憶ニ符合スルマ否ヤヲ實シタルニ、三
 浦中将ハ一言ノ下ニ岡沢中将ノ説ヲ否定シテ曰ク、
 自分ハ始メヨリ河畔ニ在リテ敵ト對陣ヲ為シ居タ
 ルガ敵ト味方ト毎朝河ヲ隔テ、柵戰ヲ試ムル者ナ
 ハアリタルハ、本書ニモ見ハ居ル通りナリ、然ルニ廿
 五日ノ朝ニハ、敵ノ陣中寂トシテ声ナク、人影ヲモ見
 らズトノコトニ、茲ニ始メテ敵が昨夜ノ中ニ退却シ
 タルコトヲ知り、便チ對岸ノ土民ニ命令シテ舟ヲ此
 方ニ致サシメ、川ヲ渡リテ直チニ敵ヲ追撃シ、本道ヲ
 會津ニ前進シタリ、去レバ岡沢隊が第一ニ津川ニ入

ヲ渡リテ津川ニ入リ、直々ニ左翼間道ノ敵ヲ追撃シ
 テ會津ニ向ヒタル折、津川ニテ振武隊ノ一人ニモ出
 逢ハガリシコトハ確實ナル事突ナルノミナラズ、食
 物中ニ毒ノ混ジマランコトヲ恐レテ兵卒ヲ警メタ
 ルコトモ、亦三浦中將ノ説ノ如クニテ、岡沢隊ハ恐ラ
 ク奇兵隊ノ通過シタル後ニ途中ノ殺賊ヲ撃退シツ
 、津川ニ入リタルモノナラント云ハリ

リタリト云フハ、如何ニモ信ズ可カラザル詭ニシテ、
 自合等ハ津川ニ於テ振武隊ニ出逢ヒタル覺ハナシ、
 敵ノ炊事場ニ飯菜ノ狼藉タルモノアリシハ、事實ナ
 レドモ、自分等ハ陰險ナル會賊ガ毒ヲ其中ニ混ジ居
 ルモ知レズト思惟シ、特ニ兵卒ヲ警メテ之ニテ觸
 レシメガリシ在ナリ、岡沢隊ノ津川ニ入リタルハ、恐
 ラク殺々ガ己ニ津川ヲ通過シテ前進シタル後ノコ
 トナルベシ、且ツ己ニ津川ニ入リテナカラ、二日ノ滞陣
 ヲ為シタル振武隊ノ行動ハ、到底理會スルコトヲ得
 ガルナリト、山口大將ハ前面ニ居ラザリシヲ以テ、敵
 情ニソキテハ詳細ノコトヲ知ラザルモ廿五日ニ川

三浦中將ハ後又當時津川口ニ在リタル會津人ニ
 ツキテ其ノ退却ノ始末ヲ尋テタルニ矢張り我々
 ノ記臆ニ違ハズトテ柴太一郎ト云ヘル人ノ自筆
 ニテ而カモ署名捺印セル九ノ書面ヲ寄セ来レリ
 戊辰ノ役曰會津藩兵津川口退陣始末御實
 向ニ對シ愚老ノ記臆概略九ノ如シ
 津川方面地勢津川ハ會津領若松ヨリ十四里
 越後國蒲原郡ニ屬シ阿賀川ニ沿タル越後街道
 ノ一宿駅ニシテ全河ヨリ分岐越後ハ通スル三
 線路アリ一ハ赤谷口(津川ヨリ九五里)津川駅ヨ
 リ直ニ河ヲ渡リ新発田ニ至ル當時ノ本街道ナリ

リニハ石間口(津川ヨリ九五里)阿賀川ノ沿岸新
 瀧ニ至ル間道ナリ、三八三月沢口(津川ヨリ九四
 里)村松ニ至ル間道ナリ
 越後方面聯合軍末期 七月下旬、交越後方面
 出陣ノ聯合軍ハ東朽尾辺ヨリ西海岸山田駅迄
 ニ至リ官軍ト對陣シテ、シカ官軍海路後方松
 カ崎ニ上陸聯合軍ノ空虚ヲ襲撃(七月末ト記臆
 セシモ日ハ不明)續テ新潟、新谷田、水原等陥落、又
 同時(日不明)長岡城再陥落、隨テ米沢藩全軍急速
 撤退、帰國等ノ事情ニ依リ聯合軍ハ包圍ノ姿ト
 ナリ非常ノ困難ヲ經テ會津領内ニ退却セリ此

時長岡附近ニテ、リシ兵ハ八十里越テ(會津郡南
 山ニ通ル高山ノ間道)水原ニ在リシ一部隊、
 兵ハ石間口ニ其他多數ノ兵皆三月沢口ヨリ津
 川ニ入ル
 津川方面防禦配置 右ノ如ク越後各方面撤退
 セシ上ハ國境要害ニ拠リ軍ニ防戦ノ配置トナ
 シ兵ヲ分テ東方面薄弱ノ所ニ轉スル方得策ナ
 リトテ談ニ決シ會津藩兵ノ半數、桑名、水戸、全
 兵又旧幕ノ脱兵(古屋作花衛門ノ率ユルモ)等
 ハ若松ハ入り庄内兵ハ若松ヲ經テ帰國セリ而
 シテ赤谷石間、三月沢等ノ三關要所ハ會津兵ヲ

配置防禦ニ當ラシム
 赤谷口及石間口敗退 右ノ如ク配置防禦シテ
 リシガ赤谷口ハ(日不明)擊破セラレ漸次敗退津
 川ニ至リ阿賀川ニ拠リ防戦石間口モ亦擊破セ
 ラレ(日不明)五十島迄退陣セシニ至ル
 若松城危急ノ報及津川方面全軍若松後進 八
 月ニ十四日會津東方面國境石筵口破レ官軍城
 不ニ進入外郭モ亦破レ藩主本城ニ籠ルトノ急
 報ニ接シ若松ノ急難ニ赴キ最後ヲ共ニセント
 ノ議ニ決シ即時該方面全軍ヲ撤シ急行若松ハ
 向ヒ後進セリ

再度津川口ヨリ進入ノ官軍防禦ノ配置
 右ノ如ク津川口ノ全軍若松ハ後進高久(若松ヨ
 リ九ニ里)辺ニ至リシニ同所ニ重臣壹野某等一
 部ノ兵ヲ率テ轉戦シツ、アリ城内ヨリモ重臣
 西郷某特使トシ官軍ノ固ヲ思ヒ出テ来リ城ノ
 守備堅固ニシテ陥落ノ憂ナケレバ津川口ヨリ
 進入ノ官軍ヲ防禦牽制スル方得業ナリトノ命
 ヲ傳フ依テ再度片門羽賀山三郷等阿賀川ノ沿
 岸ニ拠リ官軍ヲ防禦セリ尔後(日不明)官軍若松
 ヲリ越後街道ヲ急進川岸ニアル所ノ會津防禦
 兵ノ後方ヲ襲撃初テ東西官軍連絡セリ

概略右ノ事実ナルヲ以テ津川口全軍撤退セシ
 ハ全ク若松城ノ急進ヲ援助セシガ爲メ自衛退
 軍ニシテ官軍ノ襲撃ニ依リ潰走セシニ非ザル
 ハ愚老之ヲ保証ス
 附記参考 阿賀川ハ(上流ヲ只見川ト称ス)會津
 領内第一ノ大河ニシテ川上只見村(南會津郡八
 十里越ノ麓)辺ヨリ下流石間口迄曲折殆ト三十
 里ニ近ク八月月上旬ヨリ九月開城迄九五十日間
 沿岸各所ニ於テ衝突小戦アリシ所多ケレハ津
 川口ノ外或場所ニテ官軍密カニ川ヲ渡リ防禦
 會津兵ヲ撃破セシ事実アリシヤ知ラガレドモ

愚老記臆セズ
 明治廿七年八月十三日 柴本一郎
 次ガ又會津藩佐川隊ノ日記ナルモノ(佐川官兵衛
 ノ引率シタル越後國派遣部隊ノ陣中日記ナリ)ヲ
 見ルニ津川口撤退ニツキテハ九ノ如ク記シマリ
 八月廿四日 右同断ニ候処既ニ夜五ツ時比ニモ
 可有之石蓮口相破レ敵猪苗代ハ打入候趣相聞
 候ニ付番兵引上帰候様申来リ候ニ付持場々々
 引揚ゲ谷沢村ハ帰同夜九ツ時比我隊後殿ニテ
 同所出祭川端ハ難通ニ付山越致明ケ六ツ時比
 津川ハ着口但野村勝藏我隊半隊頭假役被仰付

シテ余ノ三浦中將等ト共ニ記臆スル所奇兵隊日
 記ノ記スル所亦皆斯ノ如キナリ便チ岡沢大將ノ
 記述スル所ハ其ノ結構ノ整々然トシテ猥リニ取
 撃ヲ容ササルノ觀アルニシテ三浦中將ヨリ聞ク所ニシ
 スルコトヲ得ザルナリ我ガ橋山莊ニ小集ヲ催フ
 レバ廿七年六月十四日我ガ橋山莊ニ小集ヲ催フ
 シタル折中將ハ岡沢大將ニ右ノ報告ヲ取消スベ
 キ旨ヲ勸告シ大將モ終ニ之ニ從ヒタリトノコト
 テレバ今更ラ多ク反對ノ証尤ク蒐録スルノ必要
 ナキニ似タリト雖ドモ他日振武隊ノ日記ガ如何
 ナル処ヨリ公ケニナリテ如何ナル疑惑ヲ惹起ス

辛酉

候事
 同廿五日 朝五ツ時過津川町出發夜ニ入り下
 野尻村へ着致候事云々
 此隊ハ廿四日マダ五十島田ニ在リシモノナル
 一が今夜ヨリ退却ヲ始メ廿五日ノ曉ニ津川ニ達
 シタリト云へば津川ノ守兵ガ其ノ前夜若クハ
 其朝ヲ以テ退却シリルヤ勿論ナリト知ルベシ
 柴田ノ記臆ト右ノ日記トハ多少相違スル所ナ
 一キニ非スト雖ドモ津川ノ賊軍ガ若松城危急ノ
 一報ニ接シ廿五日ノ朝マダニ自カラ引揚ケタル
 一ノ事ニ至リテハ何等ノ相違アルコトナクテ而

(257)

花ノ拙吟ハ津川を渡リテ會津ヲ折入りけるときの
作ふり
會津山面ふく風のかせ先子阿ともこの葉もたま
りかねつゝ

(256)

批評スルコト、オシリ
キヤモ知ル可カラザルニヨリ終ニ仔細ニ之リ



左ニ掲クル岩倉公ノ書面ハ、此時頃ニ到来シタルモ
ノナルバシ

前略、至急的を用而已一筆申入ハ、唯今秋田藩(初岡敬
次、遠藤弥生)西人、危急報知ニ付、一人ハ馬関ハ、回船、
久我揚碇之砌、残兵器等乗セ込、并鍋嶋兵隊(元日
リ馬関ニ到着之介)同批、直ニ羽州ハ出張之致ニ決
シ、則異艦幸ニ借入出来之事ニ付、扱一人ハ御地ハ
差向、昼夜兼行、事情直ニ可申述答ニ付、巨細御聞取
ニテ宜シク御軍談、鬼ヶ島寸刻ヲ争ヒ、羽州御援兵
之事、偏ニ御尽力懇祈致シ、ドウカ去月廿九日以来、
諸君憤發激戦、寄代之御戦功ニテ、連日連勝、終ニ賊

僅カニ村上孤城^而已ニ引慕之由、實ニ千辛万苦、押斗
 ルニモ辞以不可尽、素ヨリ紙上之可不及、九テ他日
 可期面上^ハ、臣等席上安座、只汚顔、カ併現地之模様
 イカント、晨昏遠察、若慮罷在^ハ、何分南部津輕之徒、
 全ク弱極^リヨリ、曖昧進退之由、可惡勿論之義ニ
 テハ、此上ハ、諸君ノ中一兩士ヲ勞シ、例也強兵
 御引率、一攻賊膽ヲ取挫^ハ、左内練兵毛落膽不
 可支ニ至^リ可申^ハ必然ト存^ハ、但シ越後定^リ、而シ
 テ仙庄陥^リハ、縦令會米等来春ニ残り^ハ共、天
 下之事何事カ不成^テカ、返^ス々々御方略之
 程、分^テ御頼申入^ル

大久保ヨリ小松、岩下^ハ、来状、幸ニ入一覽^ハ、誠ニ
 重疊ノ御運ト存^ハ
 全^ハ吉井来示^ハ之通り、是ヨリ晦日迄之中、更ニ五万
 兩仕立申^ハ、来月又拾万金、兩度ニサシ送り可申^ハ
 右早々^ハ、刻^ヲ筆^ヒ、要用^而已、其後之御容子、早
 便承^リ度存^ハ也

對岳

八月十八日

吉井幸助殿

山縣恭助殿

黒田了助殿

一 秋田藩、当月十一日、本國發途之由也

一 弥御東幸御治定、九月五日前後 御出陣之
 事ニ小事
 一 万事ハ軍務官并田五藏ヨリ、可申入答ニ小
 也

左内及ビ秋田ノ方面ニ伺フテ、援兵ヲ分派スルコト
 ハ、曩キニ西郷ノ新瀉ニ来リシ時ニ、已ニ之ヲ決定シ、
 薩兵五百人ト、外ニ諸藩ノ兵モ、海陸ヨリ、漸次其方ニ
 向ヒ居ケレバ、岩倉公ヨリ右ノ書翰ノ到来シタル頃
 ニハ、最早改メテ出兵スルノ必要ヲカリシナリ
 北征日誌ヲ按ズルニ、八月十九日、薩州ノ岸良彦七、
 長州ノ高須煥一、秋田ヨリ英國ノ商船ニ乗ジ、九條大

納言ノ御使トシテ、左ノ御手筒ヲ携ヘ来ルトアリ
 以急使申入ル時下、秋冷之節、弥御安全御在陣、珍重
 ニ存ル、御先月秋田表着後、引續數日連戰諸隊困苦
 不一方事ニ御坐ル、然ル処、賊勢追日四境ハ相迫リ、
 既ニ横手城モ落去、其餘十二処表ハ、南賊襲来、是又
 砲發等、兵隊ノ氣降ニモ関係、深心配罷在ル、何分賊
 勢ハ要害ニ入、官軍致奮戰ト虫ドモ、衆寡不敵、實ニ
 焦慮罷在ル、右ニ付急連其御地軍艦ニテ、人数應援
 被下度、委曲向依ヨリ御聞取、早速場御痛察被下、御
 救助深ク頼入存ル也

奥羽總督

八月十三日

北陸道
總督殿

而シテ越後口總督ヨリハ、之ニ對シテ尤、返書ヲ差
 出サシメラレタリトアリ
 御狀拜見、如命時下秋冷ニハ得共、愈御清祥御在陣、
 珍重御事ニハ、秋田表御着後、連戦ニテ、諸隊困苦
 不一方、賊勢甚盛、衆寡不敵ニ付、深ク御心配、由被
 仰越、御焦思之狀、不堪想像ハ、應援兵ノ伐、委細承リ
 此、手配、人数ハ、己ニ其々繰出罷在ハ、事ニ御座ハ、
 此地戰地又利害、都テ御使、者ハ、申合置ハ、間、御聞
 取可被下ハ、時氣不順、為國御自愛是祈ハ、多務中切

御拜復

八月十九日

越後

總督府參謀

壬生左衛門權佐

奥羽

總督府參謀中

新發田ニテ筆記セラレタル奇兵隊ノ日記ニハ、八月
 十六日、処ニ左ノ一節アリ

薩兵五百人軍艦ニ乗ジ、久保田接兵ニ行ク、出羽官
 軍數敗潰、守部叛友、賊久保田城一里半許ノ処マデ
 襲來、依之薩長ヨリ西人急ヲ告ガ來ル

便チ薩ノ岸良彦七、長ノ高須慎一ガ、九條卿ノ御使ト
 シテ、越後ニ奉リタルハ、十六日以前ノコトニテ北征
 日誌ニ之ヲ十九日トセルハ、生參謀ヨリ返書ヲ送
 ラレヨル日ト之ヲ混同シタル者ナリ
 官軍ガ津川ヨリ進テ若松ニ入ルマデノ状況ハ、亦奇
 兵隊ノ報告書ニヨリテ、其ノ梗概ヲ示スバシ
 廿九日 我一番半隊、五番小隊、芝崎口ニ進ム
 晦日 我六番小隊、夏井村ニテ、只見川ヲ隔テ賊ト
 戦フ、四番小隊、藤村ニ砲台ヲ築キ、賊ト昼夜連戦ス
 九月朔日 我二番小隊、薩州、振武、報國各一小隊、二
 道ヨリ西方ヲ攻ム、賊四小隊許、壘壁ヲ築キ拒守ス、

西方市端ニテ、銃戰少時、振武隊山手ヨリ下リ、賊ノ
 後ニ出ツ、水道ノ兵、急進シテ市中ニ入り、巷戰激烈、
 槍刀突接、我死傷十餘人、賊只見川ヲ背ニシテ渡ル
 コト能ハズ、水ニ敗ル、舟ニテ渡ル者モ、皆我銃丸ニ
 墮ル、伏屍才六七、是ヨリ川ヲ挾テ對壘ス、此日庄内
 口ノ兵羽州前ガ関ノ賊ヲ撃ツ、我一番半隊、杉手村
 ニ應援ス
 二日 芝崎口ノ兵、未明ヨリ陣ガ峰ヲ攻ム、水道ヨ
 リ、我一番半隊、藝洲半小隊、左ノ山上ヨリ、我五番小
 隊、手城ニ小隊、右ノ川手ヨリ、御親兵、手城、新谷田各
 一小隊、同ク進ム、未牌、我一番、五番合シテ陣ガ峰ヲ

奪ヒ、山上ヲ取切り、水道ノ戦ヲタスリ、川手ノ戦ハ
 甚苦シ、夕方ニ至リテ賊敗レ走ル
 四日、進テ館ノ原ヲ攻メ、尾ノ山手ヨリ、千城四小
 隊、松代、藝州各一小隊、右ノ山手ヨリ、我一番半隊、五
 番小隊、御親兵、報國隊各一小隊、巳牌館ノ原ヲ奪ヒ、
 進テ木曾村ニ戦フ、午牌賊敗レ、木曾村ニ火シテ走
 ル、昨日我三番小隊、木屋ニテ只見川ヲ隔テ賊ト戦
 フ、今日我四番小隊、椿村ニ砲台ヲ築キ、賊ト昼夜戦
 フ、我六番小隊、只見川ヲ渡リ、田中ニ出テ山上ニテ
 賊ト在候ト戦フ、賊北方高田ニ走ル、官軍皆川ヲ渡
 リ、塔寺坂ヲ下ニ至ル

十日、我三番、四番小隊、報國、振武隊等兵、若松城下
 ニ入ル、日川口官軍既ニ城ノ二面ヲ圍ム、我一番半
 隊、五番小隊、諸蕃兵ト、道ヲ分テ松岡ノ賊ヲ攻テ之
 ヲ欺リ、益進ム、賊西明寺峠ニ拒守シ、暫ク戦フ、我六
 番小隊モ、永井村山上ヨリ放射シ、松岡ニ渡川シ、西
 明寺峠ニ上リ、援戦ス、賊敗レテ小荒井ニ走ル、未牌
 後我五番小隊、千城一小隊、慶徳ヨリ小荒井ニ在候
 ス、中道ノ官軍方ニ賊ト戦フヲ見テ、五番小隊ハ之
 ヲ援ケント山上ニ登リ、中道ノ兵ニ合テ、一番半隊
 ハ、小荒井ニ向ヒ、申牌項賊ト烈シク戦フ、諸兵次第
 ニ来援、西牌賊敗レ走ル、官軍民家ニ三軒ヲ放火シ、

五所余退キ守ル、是日夜半後庄内口ノ官軍羽州関
 川雷村ヲ進撃セント中継村ヨリ間道ヲ過ギ溪間
 ヲ越ヘ、險山ヲ攀ツ、天明大代村ニ至ル岩國土州各
 一小隊ハ雷村ニ向ヒ、我一番半隊、産州三小队高鍋
 一小隊ハ関川ニ向ヒ絶險ヲ踰ヘテ潜カニ関川ノ
 一、小山ニ上ル未牌賊ヲ砲撃賊ニ百許人拒戦措ヲ失
 背山ニ走ル官軍関川ヲ放火ス雷村ニ向ヒシ兵ニ
 シ、敗レ走ル官軍関川ヲ放火ス雷村ニ向ヒシ兵ニ
 除ヲ凌キ僅ニ村端ノ賊壁ニカ、リ戦フ内我一番
 半隊、微兵一小隊羽越ノ環ヨリ峻山ヲ踰ヘ賊ノ背
 ニ出ダ、俯シ射ル賊悉ク散乱ス生擒四人アリ其翌
 小名部口官軍賊ト戦フ関川ヨリ足ヲ援ケ賊ヲ破

十四日 我三番、四番小队、報國、振武等若松城南ノ
 飯寺村ニ砲台ヲ築キ、高田口ノ賊ヲ防グ
 始メ余ハ津川陥落ノ後、進マテ天屋ニ至リ、暫ク
 同所ニ滞陣シ居リシガ、急用アリテ一旦新谷田ニ
 歸リ、再ビ天屋ニ至リタル時ニハ恰カモ野津鎮雄
 一、猶崎頼三等が、奥州口ノ兵ヲ率テ、賊ノ背後ヲ衝
 ス、越後口ノ官軍ト連絡ヲ通シタル後ニテ、其事ハ確
 カ其ノ前日、又ハ前々日ナリシ様ニ記臆シ居レリ、而
 シテ我レヨリ突進スル能ハズシテ、奥州口ノ官軍ノ
 為メニ路ヲ開カレタルハ、越後口ノ官軍ノ為メニ不

名譽ナリトシテ、当時余ノ長歎息ニ禁ハガリシ所ナ
 リ
 九ノ書翰ハ、余ガ衣屋ヨリ新發田ニ帰リ居タル中ニ
 記
 ナラレタルモノナリ

其後館ノ原其外奔走、四日五日ノ書面、漸辛ニ入申
 出、米沢之一件其他、不容易御配慮奉想像ハ、追々当
 口出兵之事申上ハ、甚指急申ハ、然ルニ強敵ト申
 十カ、孤城數日相懸リ、大兵ヲ以攻落シハ事、天下
 後世人口如何可有之哉、甚不本意也、其上城中ニハ、
 婦女子迫入込、必死ノ覚悟ト被察ハ、時々ハ紙寫杯
 揚、小兒ヲ慰ハ、様子、又大砲打入ハ時ハ、見女子ノ泣
 声相聞ハ、由、実ニ可憐之至ニ御座ハ、城ハ落シ人ハ
 尽殺スニ、官軍ノ意ニ有之間敷、敵マカラ不憚ニ奉
 出、此余御熟考之上、岩村マテ速ニ御申合可被成ハ、
 此、此、四面一步ヲ讓ラヌ様ニ相圍置、彼一策有之度

會人ハ概籠城、其他ハ所ニ拠リ、由兼テ御承知
ノ三ヶ条、帰降スル者ハユルス、一、条相加ヘ、所々
張紙ハ仕ラセ、御地御用速カニ御片付、早々御帰リ
可被下ル、余ハ其節申縮ル勿ク願首
九月八日 狭平

素狂老臺

御直披

此書中ニ、米沢之一件、其他不容易御配慮トアリ、此ノ
後ニ掲載スル前原ノ書中ニモ亦、米一策、何卒行度
云々トアルハ、上杉ノ先鋒ヲシテ降伏セシムルノ策
ニシテ、余ガ新築田ニ帰リタル重ミナル用向キモ亦

此策ノ実行ヲ懐談スルニ在リシナリ
是ヨリ先キ去ル六月ノ下旬ニ、米沢ノ遠山翠ナル者
ヨリ至江三平ニ宛タル一書到來シタル由ニテ、出雲
崎ノ陣營ヨリ芝ヲ原原ニ轉致シ来リタルコトアリ、
時山ハ己ニ戦死シタル後ノコトトテ、余ガ芝ヲ開封
シ見タルニ、京都ニ於テ時山ト相會シタルコトアリ
ト見ハ、其折ノコト并ニ別後ノ状況ヲ叙シ、米沢ノ出
兵スルハ、至師ニ抗スルニ非ズシテ、薩州ト相敵スル
ナリ、故ニ長州ハ薩ト米トノ對戦ヲ傍觀セシコトヲ
望ムトテ、頗ル説激ノ文字ヲ臚列シ、其ノ真意ハ全ク
薩長ヲ離間スルニ在ルヤ分明ナリシモ、聞ク所ニ三

レバ、右ノ遠山翠ナル者、小島龍三郎即チ雲井龍雄
 ノ表名ナリトコトナリシヲ以テ、余ハ之ヲ利用シ
 テ、米沢ト奥羽列藩トヲ相牽離セシムルノ手段ヲ取
 ルノ、得策ナルヲ思ヒ其策ニ應スヘキ者、送翰ヲ送り
 タルコトアリ、上杉ノ先鋒ヲ誘フテ、之ヲシテ帰降セ
 シメントスルノ策ニハ、自カラ歴史ノアルコトナリ
 シナリ
 余カ若松ニ入りタル時ニハ、白川口ノ官軍已ニ城ノ
 ニ面テ固ミ、城ヲ屠ルニ最早多介ノ日子ヲ要セザル
 バシト思ハレタリ、斯カル場合ニ米會シタル應援軍
 カ先鋒ニ後レタル氣味ニテ、何トナク肩身ノ狭キ感

ジアルハ、實地ニ經驗アル軍人ノ善ク知ル所ナルベ
 シ、余ハ奥州口官軍ノ本營ニ至リテ、薩州ノ參謀伊地
 知其他ニ面會シ、其ノ戦捷ヲ賀シ、既往ノ戦況ニツキ
 テ、互ニ談話ヲ為シタル後チ、攻城ノ画策決定シ居ル
 ナラバ、何レノ方面ニテモ構ハズ、一方ノ口丈ハ、我が
 手ニ於テ之ヲ引受クバシト陳ベタリ、然ルニ目下ノ
 地、日光街道ノ口カ、攻城兵ヲ不足ナル為メ、尚一茶ノ
 沱路ヲ存ジ居ルニヨリ、取敢ハズ高田駅ノ賊ヲ屠リ、
 然ル後チ攻城ノ画策ヲ論議スバシトコトナリシ
 ヲ以テ、余ハ便チ高田駅ノ攻撃ニ加勢スルコトヲ約
 シタリ

ノ賊ハ、米沢ノ降兵其背ニ出ルヲ以テ、北方ヲ去リ、
 城中ト高田トニ合ス、故ニ此戦ヒヤリ
 十八日 我ニ番、五番、六番、小隊、松代、新登田、岩國、村
 松、藝州、須坂、高田等ノ諸兵、逆瀬川、中山、新屋敷、新田
 等ノ五路ヨリ、高田ノ賊ヲ進攻ス、我ニ番、小隊、雀林
 ニ戦ヒ、六番、小隊、塚野ノ砲台ヲ抜キ、勇進シテ徑ニ
 高田ヲ東取ル、賊火ヲ放ツテ大内、田島ニ走ル、此時
 ハ十里越ヨリ奥州ニ入ルノ官軍、一手ハ、田島口間
 道ニ進ミ、一手ハ、野尻ヨリ曹村ニ進ミ、一手ハ、今日
 一戦ヒニ加ハレリ
 左ニ掲クル前原及ビ尾川ノ書束ハ、此頃接手シタル

モ、ノナルベシ

從塔寺之華墨拜誦、連日御進軍ニ付テハ、不一形御
 配慮、遙察罷在申ハ、窮寇ヲ追フ之、不策ハ、御同按ニ
 量之ハ、一策、何卒行度ト存ハ、得共、會人ノ口氣ヲ以
 考申ハ、其中ニ兵隊之線込ニ遷延、彼又西端ヲ抱ハ
 様ドモ相成ルテハ、好機會ヲ誤ルニ付、疾退兵申ハ、
 米沢若主帰國被差許ハ、事ニ付テハ、決テ御懸念ニ
 可有之存ハ、得共、米沢之後ハ、何卒御懸念被下間敷、
 例之一策、其宜ヲ得ハ、不得トハ、一向存其人ノ事
 二付、不任ニ心慮、事ニ御座ル、岩村ニ罹、疾不能起ハ、間

機密之後、其他之推任、付、先断然直入、致决意、
 其中、好機會、有之、ハ、一策ヲ施シ、於出先速、
 二、到藩工分、因可致、ト、未意仕、ハ、何分不当、
 二、付、席上論、ニ、甚愧入申、ハ、鬼角米沢ト、
 二、結、怨、ハ、様、結構仕、ハ、事第一也、御地之近况、
 得、新報、ハ、ハ、近、日、道路之説、ハ、落城仕、ハ、
 様、又々御座、ハ、報、國、嚙々御尽力ト、奉存、ハ、
 辞、退、中、上、ハ、得、去、宮、様、ヨリ、重キ御命令ヲ、
 奉、シ、ハ、例、之、ハ、條、理、拘、泥、ハ、一、疾、有、之、
 仕、ハ、尔、長、人、之、去、苗、ハ、最、早、第、一、人、ニ、
 循、之、亦、妙、也、暫、功、名、心、ヲ、淡、人、何、モ、期、
 日、ハ、决、心、也、

御冷笑可被、下、ハ、何分速、ハ、一度、ハ、平定ヲ、
 頼之事、ハ、精々尽力可仕、ハ、會計、ハ、殆金モ、
 吉井、ハ、今以卧辱、甚、ハ、困リ申、ハ、
 紙、供、電、覽、ハ、時、正、寒、為、國、家、自、重、千、金、
 素、狂、老、兄、誠、拜、
 九月十五日記

麾下

悠々翁工可然御致声至囑、第、ハ、旧病發出、
 仕、ハ、
 西、口、之、御書翰、今朝到來、難、有、拜誦仕、
 毛、片、門、マ、御進擊相成、ハ、由、別、而、御配慮、
 察、ハ、過、日、新、發、田、ニ、御約束申上、
 小、羅、紗、編、端、今

以横ハマ商人来リ不申小故、何トモ侍不答打過申
 上ハ就テハ千万夫敬ニ侍座ハ得共、私着ブルシノ
 大羅紗カフムリ、見苦敷御座ハ得共、サシ上ハ向、只
 侍寒サ凌キマデニ、御メシ可被遣ハ、私地ハ跡ニ居
 ハ、モノエ工、如何様トモ相成申ハ間、侍懸念被遣マ
 ジ、今日五泉工引移ハ積ニ御座ハ、又御直書也、此ハ
 リ、今日五泉工引移ハ積ニ御座ハ、又御直書也、此ハ
 木村承知ニハ得バ、来シテ深クラサメ可有也奉存
 ハ間、御氣遣被遣マジ、クハ先ハ侍答マテ一書呈上、
 其ウチ随介寒気御イトヒ、第一也侍事奉存ハ、謹言
 九月十五日
 弥一郎

山縣様

是ヨリ先キ、西園寺中納言ハ、三條ヨリ直チニ道ニテ
 塔寺ニ陣セラレ、總督官ニモ十三日ニ壬生御以下輕
 騎御引率ニテ新祭田ヨリ津川口エ出馬アリ、諸兵ヲ
 勞ラハセ給フテ、更ニ塔寺ニ来ナセ給ヒ御滞陣數日ニ
 及ビタリ、余ハ此間或ハ若松ニ、或ハ坂ノ下ニ、或ハ塔
 寺ニ出入從復殆ンド鞍ヲ卸ヌノ暇ナカリシカ、左ノ
 書東ヲ請取リタル時ニハ、勿論塔寺ニ在リシナリ、
 御巡行旁、士卒為侍慰勞、宮様是マテ侍出被遊ハ
 此、不日會城落去之形勢ニ付、御止被為在ハ、然也未
 至其場合、何日撤リハ哉難測、且前原、吉井初、新祭田

之方工七御出被遊度趣、一先御帰被為、在小半ト、
 思食ニハ、併折角是迄出之事故、只今活帰被為、在
 小テハ、人心之処如何ア、ラニ歎、只今御本管工罷出
 小、石御相談可申入、昔被仰付、小ニ付、如此、頃首
 二日、會談可工罷出之処、少々腹痛ニテ、因入小
 間、書アニテ相尋、小不具
 十九日
 公望

山縣殿

直披

後ニ聞ケハ、十六日、夜ニ會津藩秋月弟次郎、手代木

楯石衛門、小森一貫齋ノ三人、肥後守父子降伏ノ使者
 トシテ、潜カニ塩川ナル米沢兵ノ本陣ニ来リ、歎願ス
 ル所アリシニ、米沢ニテハ、曩キニ參謀ヨリ降伏ヲ促
 ガシタル書面ニ對シテ、何事ノ返事ヲモ致サズ、今日
 ニナリテ斯カル取次ヲ依頼セラル、モ詮方イシト
 テ、右三人ヲ縛シテ、土州ノ本管ニ送致シタルヲ以テ、
 參謀會談ノ上、情実偽リナキニ於テハ、公然降伏ノ実
 ヲ表示スベキ者ヲ諭示シ、一旦帰城セシムベキニ決
 シタル折柄、廿日ニ至リ、又々城中ヨリ降伏ノ使者ア
 リ、因ツテ来ル廿一日、朝、大牟城門ニ降旗ヲ建ツル
 コト、大小銃器ヲ引渡スコト、肥後守父子ハ軍門ニ降

伏ノ手續ヲ了シ、一先帰城シテ、父子トモニ瀧沢村妙
 國寺工謹慎スベキコト等、條件ヲ申渡シ、秋月其外
 ヲ総テ帰城セシメタル由
 是等ノ事情ハ余等ニ通知セラレタルハ、廿一日ナリ
 シト、覺ユ、去レバ余ガ右西園寺卿ノ書東ニ答エテ、宮
 ノ新登田御帰營ヲ可ナリトシタル時ニハ、余ハ園ヨ
 リ若松開城ノ已ニ眼前ニ迫レルヲ知ラサリシナリ、
 然レドモ當時ノ事情、余ハ若松ノ開城ハ已ニ眼前ニ
 迫レルヲ知リタリトモ、尚宮ノ塔寺ニ滞陣セララル、
 ヲ、必要ナリト思惟セザリシナリ、何トナレバ越後口
 總督ノ宮ハ會津ノ落城ヲ見届ケラル、ノ必要ハ之

ナキコトニテ、左内口エモ御出張相成ル筈ト云ハ、
 御帰營ニナリテモ、オ氣ニ關係アルコトナケレバナ
 リ
 廿二日シハ、敵兵ノ模様如何ニヨリ、総攻撃ヲ行フ
 手筈ナリシヲ以テ、余ハ豫テ申告シ置キタル通り、北
 陸道ハ官軍ヲ以テ、西ノ方ヲ、弘受ケカハシガ、八
 時頃ニ至リ、果シテ城守レ白旗ヲ建テ、松平容保父子
 大寺門外ニ出テ、謝罪表ヲ奉シタルヲ以テ、終ニ戦ハ
 ズシテ止ムコトヲ得タリ、因ッテ余ハ城下ハ繰リ込
 ミ居タル越後口ハ官軍ヲシテ、其日ハ中ニ、皆十阪下
 マ、引揚ゲシメタリ

是ニ於テ、余ハ鬼ニ角ニ任務ヲ終リ、最早戰地ニ滯留
 スルノ用ヲキ身トナリシレバ、帰心忽々箭ノ如ク、直
 テニ塔寺ニ至リテ西園寺御ニ謁シ、是ヨリ直テニ帰
 國ノ途ニ上ルコトヲ語リ、且ツ御ニモ、一日モ速カニ
 帰京セラレシコトヲ勸告シ、賊軍已ニ平定ニ帰シ、予
 戈ニ代ユルニ薄書ヲ以テセントスルノ時ニ当リ、其
 ノ討伐ニ従軍シタル者ガ依然トシテ淹留スルハ、弊
 多クシテ益ナキコトヲ陳述シテ、告別ヲ為シ、奇兵隊
 ノ引纏メ方ハ、芝ヲ福田ニ托シテ、其翌朝津川ニ至リ、
 木レヨリ新築田ニ出テ、總督官ニ拝謁シテ、一ト通リ
 報告ヲ為シ、且ツ拜別ノ辞ヲ陳ベタルニ、宮ヨリハ東

京ニ至リテ親シク報告ヲ為スベシトノ御セアリ、酒
 宴ヲ賜ハリテ、席上智仁勇ノ三字ノ額ヲ揮毫シテ、下
 シ賜ハリタリ
 ・前原寺ニモ、夫レニ告別ヲ為シ、南野一郎ト一
 僕トテ洗ハテ、新築田ヲ發シ、新潟ニ赴キタルハ、何日
 ナリシヤ、今ハ芝ヲ記臆ニナルモ、恩フニ九月ノ廿五
 六日頃ナリシナラン乎、志ニ掲クル福田ノ手紙ハ、新
 潟邊ニテ落手シタル者ノ様ニ覺エ居レリ
 御發程後、白川口迄御引揚、御風聞有又、且城受取ニ
 付、老臺越後地兵負御付〇御出立事申参リル間、例
 也、越前五小隊、新築田三小隊、八十里越エ松代、其外

十六隊、阪下等、工振武、全隊、其外、津川、辺、置、新、癸、
田、其、外、六、七、小、隊、守、衛、奇、兵、報、國、千、城、隊、其、他、諸、藩、不、
殘、引、取、之、手、筭、即、時、一、決、一、昨、日、ヨ、リ、引、揚、奇、報、ハ、
五、泉、千、城、隊、新、津、其、他、ハ、新、癸、田、右、様、御、承、知、置、可、被、
下、ハ、彼、一、条、如、何、哉、ト、紫、居、中、ハ、速、ハ、肝、要、也、南、氏、
ハ、夫、度、サ、セ、当、地、指、控、サ、カ、御、指、揮、相、待、ハ、第、モ、今、曉、
五、泉、着、十、郎、其、外、跡、々、始、末、仕、ハ、御、放、念、可、被、下、ハ、何、
カ、ト、御、氣、付、セ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
青、万、可、申、〇、ハ、勿、々、頓、首、

九月廿六日
二白、西園寺殿ニ、御引揚一決、例之奇報御免之

事實ハ、内々申置ハ、其念可被下ハ、帰思甚切、追御
一笑、御立後、吉井先生塔寺工来話、老臺之
事ハ、云ハズ

素狂老臺 悠々翁
御直

新、瀧、ヨ、リ、相、崎、ヲ、經、テ、高、田、ニ、出、テ、同、所、ニ、於、テ、戰、死、者、
ノ、墳、墓、ヲ、掃、ヒ、夫、レ、ヨ、リ、川、中、嶋、ノ、古、戰、場、ヲ、吊、テ、武、
田、上、杉、兩、雄、ノ、事、跡、ヲ、追、懐、シ、銃、砲、ガ、重、ナル、兵、器、ト、テ、
リ、タル、ノ、今、日、有、名、ナル、古、戰、場、ガ、意、外、ニ、狭、小、ニ、シ、テ、
復、タ、大、軍、ヲ、用、テ、ハ、足、ラ、ズ、テ、感、ス、ル、コ、ト、益、ス、切、
ナ、リ、シ、ナ、リ、

新ッテ朝發晚宿、十月ノ四五日頃ニ、甲府ニ到着シタ
 ルガ、同所ニテ聞ク所ニ從レバ、當時恰カモ東京ニ御
 遷幸ナリシニ、主上ニハ、七日ニ三嶋駅ニ御着輦ノ御
 都合ナリトノ事ナリシヲ以テ、然ラハ東京ニ至リテ、
 御着輦ヲ待テ奉ルマデモナク、是ヨリ直ニ三嶋ニ
 出テ、供奉ノ一人ナル木戸參議ニ面會シ、一應報告
 ヲ為シテ、其ノ取次ヲ頼ミ、速カニ京都ニ赴カンモノ
 ト、山越シヲシテ三島ニ至リ、一書ヲ參議ニ致シテ、面
 會ヲ求メタルニ、參議ヨリ花ノ返書アリ
 只今四字半頃ニモ有レト歎、一番ノ合談相鳴、今日
 供奉當番ニ付、不取敢支度取カ、リト此、不圖モ采

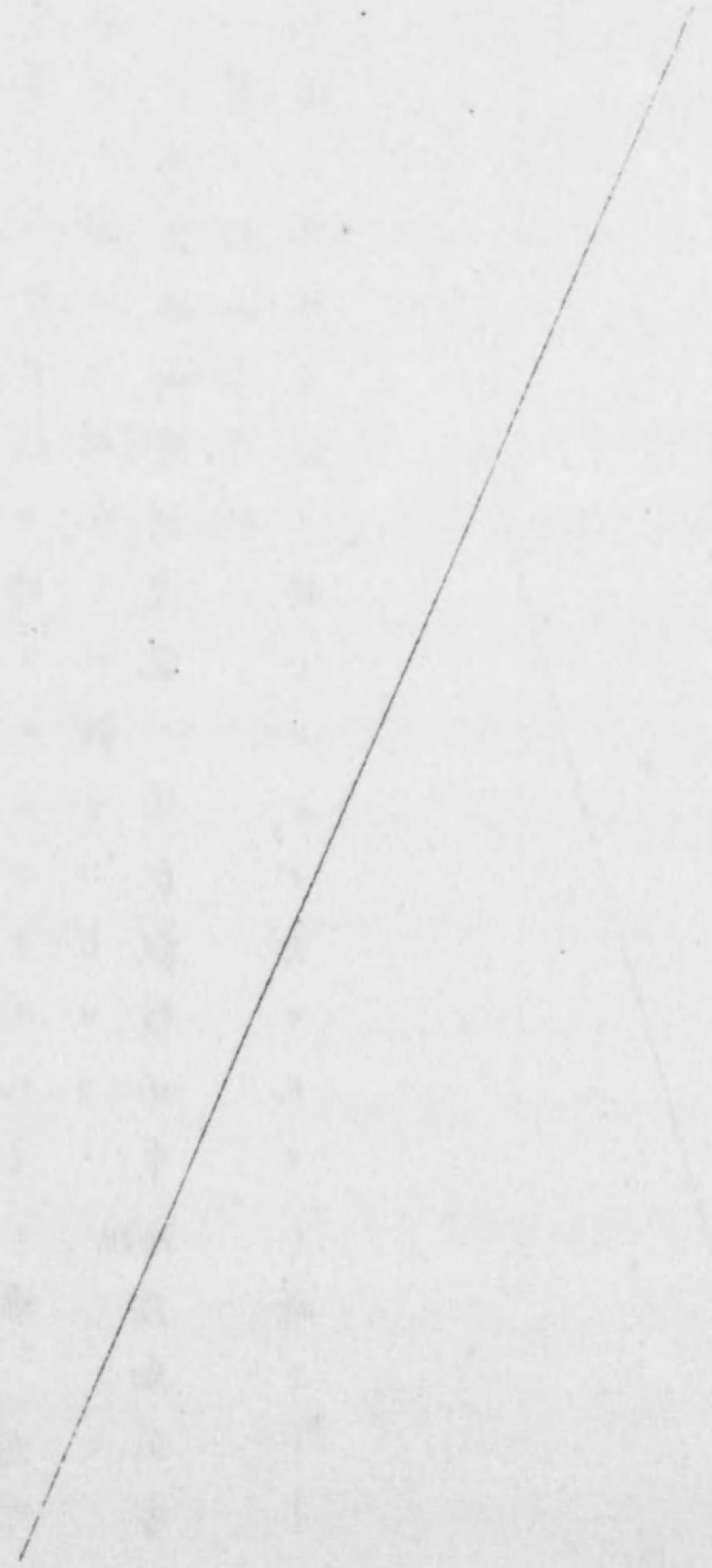
雲落掌、夢中ノコ、地直ニ拝披仕ル此、態ト当道ニ
 御出^湯之由、実今春未之事不堪想像ト、今日右之都
 合ニテ供奉故、少シハ隙取可申歎、精々都合可致ト
 存小間、何分ニモ第旅寓ニテ、淨待可被下ト、何モ拜
 青上ト、喜憂之件々相包ニ置、今宵ヲ相期シ相樂ミ、
 勿々擱筆、頌首拜復
 十月七日
 素狂盟兄
 可拜復
 乱筆高恕
 于令

便チ參議ノ旅館ニ待テ請ケテ、面會ヲ為シ、戰爭ノ始
 終ヲ語りテ、朝廷ニ上陳ヲ乞ヒ、積話ニ更ノ深クルヲ

忘レタリシガ、参議ハ余ノ直ニ帰郷シ去ルヲ不可
 トシ、東京ニ至リテ正式ニ報告ヲ為サバル可カラズ
 トノ論ニテ、固ク執ツテ聽カガリシヲ以テ、止ムヲ得
 不東京マテ同行スルコト、ナリタリ
 東京ニ滞留スルコト数日ニシテ、東海道ヲ京都エ下
 リタルガ、國內ノ已ニ平定ニ帰シタル上ハ、一度海外
 ヲ巡遊シタシトハ、余ノ素願ナリシヲ以テ、曩ニ三島
 ニ於テ、已ニ木戸参議ニ其ノ周旋ヲ依頼シ置キシガ、
 今度ニ亦、参議ヲ始メ、其他ノ先輩ニ、之ヲ懇囑シ置キ
 ヲリ、且ツ一口ノ短評ヲ留リタリ

参議ノ戊辰日誌ヲ按スルニ、十月十九日ノ條ニ、途中
 函根ヲ踰ユル時九ノ一詩ヲ口占セリ
 万騎動搖山腹、快風一掃奏凱歌、帰來初踏函関雪、
 奥水越山今奈何
 参議ノ戊辰日誌ヲ按ズルニ、十月十九日ノ條ニ、

元ノ如ク誌シアリ
 山縣任々来ル今日出立帰國酌一杯送別彼過于余
 求物贈余宝藏短刀今日附一詩
 此氣慕精緻此心忍梅花兄今求我物則贈鉄典花
 天地有二物世間何喧嘩
 素狂經越之戰爭到海道三島駛典余相逢共来于
 東京談論時事七八年間忽逢忽別典四時^無定常又
 余為別非詩非語信口十字以送之
 余ハ同日此詩ヲ獲ガリシト雖ドモ余ニ贈ル為メニ
 參議ノ賦シタル詩ヲレバ特ニ茲ニ也ヲ掲ケテ泉下
 ノ人ニ謝セント欲ス



京都ニ於テ、恰カニ越後ヨリ引揚ケ来リタル奇兵隊
 ト相會シ、先ヅ東福寺其他ニ埋葬シテリタル同郷殉
 難請氏、為メニ招魂祭ヲ執行シ、遊覧ニ数日ヲ消費
 シタル後々、余ハ稍諸人ニ後レテ、大坂ヲ發船シタル
 ガ、風波ノ都合ニテ、上ノ関ニ上陸シ、里正ノ宅ニ小憩
 シテ、聞ク所ニヨレバ、福田ハ帰郷後卒倒シテ、餘程危
 篤ノ病状ナリト云ハリ、豈ニ愕然タラザルヲ得ンヤ
 三田尻ニ着シ、福田ノ病状ヲ山根某ニ尋ナリ、
 馬車ヲ急キ秋ノ場ヨリ見レド、福田ハ已ニ泉下ノ
 客トナリ居タリ、已ニ時山ト堀トヲ失ヒ、今又福田ヲ
 失フ、余ノ悲シミ如何ゾヤ、天地ノ寂寞ヲ感セザラン
 ト欲スルモ、能ハザルナリ、是ニ於テ、福田ノ為メニ後

事ヲ經營シ、帰ツテ無隣庵ニ入りタルハ、年ノ暮ニ近
 フテ、リシナリ

22

是書山縣元帥ノ手記スル所ナリ
今元帥ニ請フテ之ヲ假リ謄寫ス

明治四十三年四月

參謀本部第八課

參謀本部謄本ニ據リ轉寫印刷ニ付ス

昭和五年秋十月

陸軍省編修掛



參拾册ノ内 20

302
138



終

